

「コンビニ人間」はなぜ拒絶されるのか？

—アブジェクション理論による社会的排除の分析—

プットラ ランガ・プラコサ (1624104)

1. はじめに

現代の日本社会において、女性はしばしば、教育を受け、結婚し、母親となり、安定した仕事に就くという、明確に定められた人生の道筋をたどることが期待されている。こうした道から逸脱する者は、奇妙な存在、逸脱者、あるいは脅威とみなされることもある。一方で、日本の女性政治活動家・小酒部さやか氏は、2017年のあるインタビューで、「男性の上司たちから、キャリアか赤ちゃんか、どちらかを選べと言われたことがある。彼女は仕事を続けたければ、赤ちゃんをあきらめるべきだとも言われました」と語っている。このように、明確に定められているとされる道筋であっても、状況に応じて恣意的に変えられてしまうのが現実である。このような背景のもと、現代の女性に期待される役割は、ますます曖昧で複雑なものになっているといえるだろう。

村田沙耶香の『コンビニ人間』(Convenience Store Woman)は、このような状況を鋭く描き出している作品である。この作品は、2016年に出版され、第155回芥川賞を受賞し、30以上の言語に翻訳されており、日本国内外で高い評価を受けている。

主人公の「古倉恵子(ふるくら けいこ)」は、36歳の独身女性で、大学時代から18年間コンビニでアルバイトを続けている。彼女は幼い頃から周囲の「普通の人」になれず、社会から期待される生き方が理解できないまま生きてきたが、コンビニのマニュアルに従って働くことで、自分が社会の一部として機能しているという実感を得る。同時に、社会的期待に一つも応えていない恵子は好奇の目と拒絶の対象となっている。

恵子の行動は周囲の人々からよく「変わっている」と見なされる。一つの例では、恵子は幼い頃、公園で死んでいた小鳥を見つけ、「焼き鳥が好きなお父さんのために焼いて食べさせよう」と考え、家に持ち帰ろうとする。この発想に周囲は驚き、彼女を「変わった子」と見なすようになる。他には、小学校の体育の時間、男子同士が取っ組み合いの喧嘩を始め、「誰か止めて!」という声が上がった際、恵子はスコップを持ち出し、喧嘩している男子の頭を殴って止める。彼女にとっては「止めて」と言われたからの行動しただけだが、周囲には理解されなかった。

大人になっても、恵子は幼少期と同様の拒絶を受け続けている。ただし、大人になった彼女が受けるのは、行動そのものへの拒絶ではなく、彼女のアイデンティティそのものへの拒

絶である。結婚せず、三十代半ばになっても十八年間アルバイトを続けている恵子の生き方は、社会が期待する「正しい人生の道筋」から明らかに逸脱している。恵子が単に精神を病んだ人間であり、社会に適応する能力がない人にすぎないのであれば、私たちにはずっと受け入れやすいだろう。ただし、恵子は決してそういった単純な枠には収まらない。作中で彼女は変に思われつつ、自らの仕事に真摯に取り組み、鋭い観察眼を備えた人物として描かれている。外見では、安定している生活を送っているはずだが、恵子は周囲に「治すべき人」、または「修正すべき異常物」として扱われている。

先の事例の小酒部も、政治家として活躍しているにもかかわらず、上司たちに圧迫を与えられる。恵子への扱いも小酒部への扱いも、自分が気に入らないものは、すぐ直したり、拒絶したりする傾向があるところについては、共通する点があるといえる。小酒部の事例のように、現実起きた拒絶の根本を探るため、本研究では『コンビニ人間』における排除行為を取り上げ、その拒絶の構造を明らかにすることを目指す。そのために、本研究では、ジュリア・クリステヴァのアブジェクション（排除）の理論を用いる。

クリステヴァの定義によれば、アブジェクションとは、アイデンティティ、秩序、意味を脅かすものを社会が排除するメカニズムのことである。また、「アブジェクト(排除されたもの)」とは、それらを脅かすものである。先の小酒部の事例では、少なくとも、上司たちの考えでは、「女性は仕事するか、子育てをするか、両方は絶対にダメだ」という秩序がある。アブジェクション論によれば、小酒部は上司たちの考え、または秩序を脅かす存在として見えるため、上司たちは小酒部にそのような発言をしたわけだ。

アルベル・カミュは「フィクションとは、真実を語るための嘘である。」と述べた。この言葉は、物語や小説が現実の出来事ではない「作り話（嘘）」であっても、その中に人間の本質や社会の真実が込められているという意味だ。つまり、フィクションは虚構を通して現実を照らす鏡とも言える。コンビニ人間は小酒部の事例と共通点が見えるため、本研究は排除について深く考察するために、コンビニ人間における排除行為をアブジェクション論を用いて、検討する。具体的には、恵子に向けられる拒絶がアブジェクション理論においてどのように説明しているのかを検討し、社会における規範逸脱に伴う排除のメカニズムを明らかにすることを目指す。

2. 先行研究と本稿の目的

2.1 「生成過程にある主体」と「アブジェクション」

まず、ジュリア・クリステヴァの思想の中で重要な概念の一つを紹介する。それは、「生成過程にある主体 (le sujet en procès)」という概論である。クリステヴァ(1974/1984)は「主体は常に変化している過程にあり、決して固定されたものでも、完全なものでも、完結したものでもない」と述べた。すなわち、好き嫌い、性格、アイデンティティなどと言った主体性は固定なものではなく、常に変化している。変わり続ける中で、自分を定義するものにしがみつきながら、私たちは常に、自分のアイデンティティの境界を交渉し、守ろうとしている。

例えば、自らを「運動好き」であると信じる人は、運動を継続することによってそのアイデンティティを維持しているといえる。この自己を維持するための交渉はよくアブジェクション(排除)が伴う。

「アブジェクション」は馴染みがあると同時に不快なものに対して嫌悪感を抱くという心理的、感情的、文化的な体験を指している。その体験を引き起こすものは「アブジェクト」と呼ばれている。「アブジェクト」は主体でも客体でもないため、馴染みと不快感を同時に思わせるのだ。つまり、自分の一部であるが、維持したいアイデンティティと合わない、排除されているものである。クリステヴァ(1980/1984)は「アブジェクトは客体の特徴の一つしか持っていない、それは私に対峙すること。… アブジェクトを拒絶するというのは、私でないものを否定するだけでなく、私の一部を否定するでもある」と主張した。アブジェクトと言ったものを排除するのがアブジェクションと言うのだ。

先の運動が好きで人の例を使う。その人は毎日運動をしているにもかかわらず、ある日突然運動をしなくなってきた。それによって、「自分は運動が好きではないかもしれない」という不安や疑念が湧いたとする。この時、運動をしない自分という存在が「運動が好き」というアイデンティティに対して脅威となる。その結果、運動をしないことを自分から排除しようとし、罪悪感を感じるようになる。このように、自身のアイデンティティと相反する側面を拒絶しようとする心的過程が、アブジェクションである。この人は、自分のアイデンティティを守るために、運動しない自分を拒絶し、運動を続けることで「自分は運動好きな人である」というアイデンティティを保とうとする。このように、アブジェクションは自分にとって受け入れがたいものを排除する過程として理解できる。アイデンティティが脅かされる時、その不安や疑念を排除し、自分に合ったものだけを保とうとするのがアブジェクションだ。これは一人の主体の内面において起こる現象であるが、同様のメカニズムは社会という集合的な主体にも見られる。

このアブジェクションは個人のレベルだけに留まらず、社会全体も行っている。Michel Foucault(1975)は「近代社会は、権力の行使を監視と排除に基づいており、異端や逸脱する者を排除することで秩序を維持している」と述べた。例えば、あるコミュニティにおいて伝統的な家族観が強く根付いているとする。そこでは「結婚し、子どもを持つこと」が社会的に望ましい女性の役割とされている。一方、独身で子どもを持たない女性が増えてきた場合、その女性たちは「社会の期待にそぐわない異端者」として扱われることがある。この場合、コミュニティは「独身で子どもを持たない女性」という存在を社会的な秩序や価値観を維持するために、「アブジェクト」として排除しようとする。例えば、陰口や冷たい視線、時には制度的な不利益を受けることもあるだろう。この排除の行為が「アブジェクション」であり、社会は自身の「正常な家族像」というアイデンティティを守るために、境界を曖昧にする存在を嫌悪し、排除するのである。個人レベルのアブジェクションが「自分の中の受け入れがたい部分を拒絶する」ことを指すのに対し、社会的レベルのアブジェクションは「社会の価値観や規範を脅かす存在を排除し、境界を明確に保とうとする」過程を指してい

る。

クリステヴァは「主体は、セミオティックとシンボリックなものの間を果てしなく交渉している」と述べている。本研究で行う分析のために、クリステヴァが指す「セミオティック」と「シンボリック」の概念を理解する必要があるため、次の節でこれらの概念を紹介する。

2.2 「セミオティック」と「シンボリック的秩序」

クリステヴァによれば、アイデンティティの中の「セミオティック」は、言語化される前の身体的な基盤、感情的な力、そして非言語的な力を指す。言語で説明されるわけではなく、非言語、感情的、あるいは身体的なアイデンティティのことである。それに対して、シンボリックは言語や構造などで形作られているアイデンティティである。セミオティックはシンボリック的（構造化され、言語化された）自己の下に、またはそれと並行して存在し続ける。すなわち、シンボリック的なものはアイデンティティにその形と言葉を与える一方で、セミオティックは、たとえ言葉でうまく表現できなかったとしても、アイデンティティに命、エネルギー、そして強度を与えられている。

クリステヴァは、私たちが決して純粋にシンボリック的な存在ではないことを主張している。セミオティックは常に存在しており、それが溢れ出したり統合できなかつたりすると、アブジェクションが生じる。この二つの力を常にバランスさせようとするため、クリステヴァは、主体は常に生成過程にあると主張した。

ここで、セミオティックとシンボリックとアブジェクションの関係性を示すために、運動が好きな人例をもう一度使う。運動好きな人にとって、シンボリックは「私は健康だ」や「私は運動が好きな人だ」という自己認識に構造を与える。一方で、セミオティックは、そのアイデンティティを実感させ、生き生きとさせる身体的および感情的な体験を提供する。両者が一体となって自己像を維持し、何か（例えば病気や怠惰）がそのバランスを崩すと、アブジェクションが生じる。

表1「アブジェクト」と「セミオティック」と「シンボリック」の関係性

概念	特徴	例	アブジェクションの関連性
セミオティック (semiotic)	アイデンティティの感覚的な基盤（感情、身体感覚など）	音楽を聴いて涙が出る、緊張でお腹が痛くなる	統制できなくなると、アブジェクトになる可能性がある。
シンボリック (symbolic)	社会的なルールや言語によって自己を明確化し、安定化するもの	「私は努力家です」と言う、国籍や宗教で自分を説明する	セミオティックを抑圧・統制する力を持ち、バランスが崩れるとアブジェクションが生じる。
アブジェクト	セミオティックとシンボリックに統合できないもの	社会が「異常」とみなす人を排除する、汚れた服をすぐ脱ぎたくなる	セミオティックが象徴的秩序に統合されずに漏れ出すと、アブジェクションとして排除される。

クリステヴァのアブジェクション理論は、「自分らしくいるためには、嫌いなものや自分に合わないものを排除しなければならない」と説いている。社会的な主体として成立するためには、セミオティックから戻ってくる「アブジェクト」と呼ばれるものを常に抑圧し、排除し続ける必要があると論じている。この絶え間ない過程こそが、クリステヴァのいう「生成過程にある主体」である。

2.3 アブジェクション論に関する研究

クリステヴァ(1980/1984)によると、文学作品はアブジェクトを映し出したり、排除したり、披露するために作用している。文学作品では、どのようにアブジェクトが起こっているのかを知ることができ、アブジェクトによる刺激を体験することもできる。

Creed (1993/2023) は、ホラー映画において女性キャラクターが「モンスターの女性(monstrous-feminine)」として描かれる理由を、アブジェクション理論を用いて分析した。彼女によれば、女性の身体や母性、そして性的表現は、境界や秩序の安定を揺るがす存在として恐れられる。たとえば、出産や生理など、女性の身体に備わる「流動性」や「分泌性」は、身体の内と外、自己と他者の境界を曖昧にするため、社会的・象徴的秩序を脅かすものとみなされる。そのため、こうした女性の身体性は「不潔」「不安定」「恐怖」の象徴としてアブジェクト化され、排除の対象となるのである。

Tyler (2013) は、クリステヴァのアブジェクション概念を社会的・政治的文脈に拡張し、「社会的アブジェクション (social abjection)」という枠組みを提唱した。彼女は、新自由主義体制下のイギリスにおいて、貧困層、移民、福祉受給者などがいかに国家やメディアによって「不要で嫌悪すべき存在」として構築され、社会的に排除されていくかを分析した。とりわけ、排除される人々が象徴的に「汚れた存在」とみなされることで、社会的合意のもとで差別や抑圧が正当化されていく様子を明らかにしている。

日本文学において、アブジェクション理論を用いて現代女性の「排除される生き方」を考察する研究は、未だ十分に蓄積されていない。特に、『コンビニ人間』の主人公・古倉恵子のように、結婚も出産もせず、正社員にもならず、いわば「社会から逸脱した存在」がどのようにアブジェクトとして扱われるのかを検討することには、大きな意義がある。

本研究では、クリステヴァの理論を基盤に、クレイドのジェンダー的視点とタイラーの社会構造的分析を統合的に活用し、村田沙耶香の『コンビニ人間』における主人公・恵子がどのようにアブジェクトとして構築され、いかなる社会的・文化的力によって排除されるのかを多角的に検討する。すなわち、アブジェクションを単なる心理的反応としてではなく、ジェンダーと階層、そして規範的な正常な人間の枠組みの中で生じる現象として読み解くことを試みる。本研究は、これら三つの理論的枠組みを連関させることで、古倉恵子という存在を通じて、現代日本社会における排除の構造とそのメカニズムを立体的に解明することを目的とする。

2.4 『コンビニ人間』に関する研究と残された課題

『コンビニ人間』に関する先行研究の傾向を示すために、ここでは二つの分析を紹介する。第一の研究では、『コンビニ人間』がどのように女性のステレオタイプを描写しているのかを検討する。さらに、主人公がそのステレオタイプからどのように逸脱しているかを明らかにすることを目的としている。分析には、シモーヌ・ド・ボーヴォワール(Simone de Beauvoir)の実存主義フェミニズム(feminism existentialism)と、マンスール・ファキー(Mansour Fakih)のジェンダー差別論が用いられた。

その結果、この作品には三つの主要なジェンダーステレオタイプが存在するとされている。第一に「女性は母親になるべきである」という期待、第二に「女性は未熟で無能である」という偏見、そして第三に「女性は男性の性的要求を満たすための存在である」という見方である。主人公・恵子は、第一と第三のステレオタイプに適応できず、またフリーターという不安定な立場にあることで第二のステレオタイプにも当てはまるため、社会からのジェンダー差別を受ける存在として描かれている。物語の結末で恵子はこれらの期待を拒絶するため、この研究は『コンビニ人間』を、伝統的なジェンダー規範に対して批判的な姿勢をとる作品であると結論づけている。(Yulistari & Aisah, 2022)

第二の研究として、Nayak & Aashrita (2024) を取り上げる。この研究では、『コンビニ人間』を対象に、ジュディス・バトラー(Judith Butler)の「ジェンダーのパフォーマティヴィティ(Gender Performativity)」理論を用いて、ジェンダーの観点からより深く分析している。バトラーは、ジェンダーは本質的・不変的な属性ではなく、社会的な規範や期待に応じて繰り返される行為によって構築されると主張している。すなわち、個人は「男性らしさ」や「女性らしさ」という固定された特性を持っているのではなく、日常の行動や表現を通してジェンダーを「演じている」のである。この観点から、Nayak & Aashrita (2024) は、恵子を、家父長制社会において受け入れられない社会的交流に対して独特の認知的反応を示す個人として位置づけ、彼女に課せられたジェンダーの構築が彼女のアイデンティティにどのように影響しているかを探究した。さらに、恵子がコンビニを社会的期待から逃れる「聖域」として活用している様子を考察した。

恵子は社会的規範、特にジェンダーに関する期待を自覚しており、そのため同年代の同僚の行動を模倣せざるを得ない状況にある。バトラーのジェンダー・パフォーマティヴィティの観点から見ると、恵子の行動はその理論の実例となっている。また、コンビニの環境音に対する恵子の身体的反応は、彼女が社会的期待から逃れるための聖域としてコンビニを見出していることの証拠となっている。コンビニ人間は、古倉恵子を通じてジェンダー視点とパフォーマティヴィティの複雑な関係を詳細に描き出している。恵子の認知的な反応や社会的な葛藤は、個人の本質的な自己と社会的期待との間にある緊張関係を浮き彫りにしている。物語は、ジェンダー役割や社会規範が個人のアイデンティティにどのように影響を及ぼし、それらの圧力の中で個人がどのように対応し、交渉していくかを示している。本作品は、社会的役割のパフォーマティブな性質と、制約された枠組みの中で個人の主体性を維持

することの複雑さについても考察している。このように、コンビニ人間の研究は大きくジェンダーの観点で行われていた。

他の研究を挙げると、Phumsom (2023) は、本作における男性主人公の「マスキュリニティ危機」を分析し、男性性の揺らぎを通じてジェンダーの不安定さを描き出している。また、Gaur (2023) は、ポストフォーディストの日本の職場環境における不安定性とパフォーマンスを、主人公の職場経験を通じて検討し、労働環境におけるジェンダー役割の形成に注目した。これらの研究からも明らかなように、『コンビニ人間』の分析はほとんどの場合ジェンダー理論と密接に結びついている。

これらの研究に共通しているのは、本作品が社会におけるジェンダー期待の不安定さを、期待から逸脱する主人公の姿を通して示していることである。ただし、『コンビニ人間』には、恵子が公園の鳥の件や、喧嘩をしている男の子の頭を叩く場面など、単なるジェンダー研究だけでは説明しきれない逸脱が描かれている。そこで本研究は、ジェンダー研究を超えて、こうした逸脱の深層を探ることを目的とする。ジュリア・クリステヴァの「アブジェクト」理論は、こうした逸脱や拒絶の構造を分析するうえで極めて有効であると考えられる。

本研究では、アイデンティティと主体性を中心に、恵子の逸脱性と曖昧なアイデンティティがどのように排除や拒絶を引き起こすかを明らかにする。このように、本研究は、より深い解釈を行うことで、先行研究を補充するものである。それは、単に恵子を社会的に逸脱した人物としてだけではなく、身体的衝動（セミオティック）と文化的構造（シンボリック）の間に位置し、その社会的秩序を揺るがす存在として解釈する。したがって、先行研究と同様に社会的拒絶と異常性を扱っているが、本研究はクリステヴァの概念を用いて、『コンビニ人間』の研究にアイデンティティに関する精神分析を提供することが研究の意義となる。

本研究は、村田沙耶香の『コンビニ人間』をジュリア・クリステヴァの精神分析理論、特に「生成過程にある主体（Le sujet en procès）」、「セミオティック」、「シンボリック」、「アブジェクション」の概念を用いて分析する。『コンビニ人間』をアブジェクションの視点から分析することにより、恵子の「異常性」が単なる個人的な癖ではなく、区別できないものを排除することで境界を維持しようとする社会の在り方であることを論じることができる。さらに、恵子の身体、行動、またはアイデンティティが、社会の規範と秩序をどのように不安定にしたかも明らかにする。

3. 研究方法

本研究では、ジュリア・クリステヴァの精神分析理論、特に「アブジェクション (abjection)」の概念を用いて、村田沙耶香の小説『コンビニ人間』を分析する。分析手法としては、質的なテキスト分析を中心とし、以下の手順で考察を進める。

第一に、作品中から分析対象となる場面を選定する。具体的には、主人公・古倉恵子に対する差別的言動や説教的な発言など、社会的圧力が顕在化する場面を中心に取り上げる。本

節では、これらの場面を分析対象として選定する理由についても書いていく。

第二に、選定した場面に対して、クリステヴァの概念枠組みに基づく分析を行う。「セミオティック (semiotic)」、「シンボリック (symbolic)」、「アブジェクション (abject)」の三つの要素に着目し、それぞれの場面における言語的・非言語的要素を分類・解釈する。これにより、古倉恵子のアイデンティティ構築がどのように社会的規範や排除のメカニズムと交差するのかを明らかにする。この第一と第二のステップは内容分析という節で行っていく。分析は場面ごとに行う。各分析は表 2 を用いて、まとめていく。

表 2 ジュリア・クリステヴァの概念

クリステヴァの概念	定義	物語の指標
生成過程にある主体 (Le sujet en procès)	アイデンティティや自己は固定ではなく、常に変化している	自分に対する視線の変化を示す恵子の内面描写など
シンボリック (Symbolic)	規則、言語、社会秩序	友だちや家族が恵子に「普通」を押し付けることなど
セミオティック (Semiotic)	身体、本能、衝動、感情	恵子の習慣、手振り身振り、自発的な考え、思い、または行動など
アブジェクション (Abjection)	アイデンティティと秩序を乱すもの	恵子に対する周りの反応 恵子が排除された場面など

最後に、以上の分析を踏まえ、本研究における全体的な考察と結論を提示する。特に、アブジェクションという概念が、古倉恵子に対する差別や拒絶をいかに理論的に説明しうるのかを総括し、作品と社会の接点を明らかにする。

4. 内容分析

本稿では、物語の展開と恵子の内面の変化を整理するため、分析を四つの部分に分けて行う。まず 4.1 節では、恵子が幼少期に経験した社会からの拒絶と、その原因となったセミオティックな衝動に注目し、彼女がなぜ社会に馴染めない存在＝アブジェクションとなったのかを明らかにする。次に、4.2 節では、そうした背景を持つ恵子が、コンビニという空間を通して「普通」を装い、社会的圧力と折り合いをつけようとする姿を分析し、その折り合いは結局崩れることも指摘する。さらに 4.3 節では、恵子が白羽との関係を利用し、より直接的に社会の象徴的秩序に適応しようとするが、その方法は実質的に白羽の価値観と戦略に基づいていることを指摘する。最後に、4.4 節では、物語の終盤において、恵子が自らのセミオティックな欲動と向き合い、最終的に自分自身のやり方で社会の圧力に対処する姿を読み解く。これら四つの分析から、恵子の「拒絶 (4.1) ・適応 (4.2) ・再拒絶 (4.3) ・自己選択 (4.4)」という一連の過程を立体的に考察することを目指す。

4.1. 幼少期の恵子 — アブジェクト化の起点としてのセミオティック

まず、恵子の幼少期に焦点を当て、彼女がいかに「アブジェクト」として社会から拒絶される存在にさせるきっかけとなった出来事を、クリステヴァの「セミオティック」と「シンボリック」の枠組みを用いて検討する。検討するために、これから三つの事例を挙げていく。

『コンビニ人間 p. 12-13』	
1	「どうしたの、恵子？ ああ、小鳥さん...！ どこから飛んできたんだろう... かわいそうだね。お墓作ってあげようか」
2	私の頭を撫でて優しく言った母に、私は「これ、食べよう」と言った。「お父さん、焼き鳥が大好きだから、今日、これ焼いて食べよう」
3	「ほら、皆も泣いているよ。お友達が死んじゃって寂しいね。ね、かわいそうでしょう？」
4	「小鳥さんはね、お墓をつくって埋めてあげよう」
5	「なんで、せっかく死んでるのに」
6	私は、父と母とまだ小さい妹が、喜んで小鳥を食べているところしか想像できなかった。父は焼き鳥が好きだし、私と妹はから揚げが大好きだ。公園は一杯いるからたくさん取って帰ればいいのに、なんで食べないで埋めてしまうのか、私には分からなかった。
7	母は「いい、小鳥さんは小さくて、可愛いでしょう？ あっちでお墓を作って、皆でお花をお供えしてあげようね」と言い、結局その通りになったが、私には理解できなかった。

これは、恵子が幼少の頃を思い出している場面である。恵子は地面に倒れて、死んだ小鳥を見つめた。恵子は地面に倒れて死んだ小鳥を見つめていたが、それに気づいた母親は、小鳥のためにお墓を作ることを提案する（1行目）。ただし、恵子は「これ、食べよう」「お父さん、焼き鳥が大好きだから」と返し、小鳥を食事にしようとする（2行目）。これを聞いた母親をはじめ、周囲の人々は驚きを隠せず、母親はその発言を「間違っている」と認識させようと、「かわいそうだね」「皆も泣いているよ」などの言葉を繰り返していた（3～4行目）。恵子はなぜ小鳥を埋葬しなければならないのかを理解できないままであった（6行目）。最終的には、小鳥にお墓を作ることになった（7行目）。

恵子が小学校にいた時にも似たような事件があった。それは、彼女が小学校のクラスで男子の喧嘩を止めるために、一人の男の子の頭をスコップで叩いた場面である。

『コンビニ人間 pp. 14-15』	
1	「誰か先生呼んできて！」「誰か止めて！」悲鳴があがり、そうか、止めるのか、と思った私はそばにあった用具入れをあげ、中にあったスコップを取り出して暴れる男子のところに行って行き、その頭を殴った。
2	周囲は絶叫に包まれ、男子は頭を押さえてその場にすっ転んだ。
3	「恵子ちゃん、やめて！ やめて！」と女の子たちが泣きながら叫んだ。
4	走ってきて、惨状を見た先生たちは仰天し、私に説明を求めた。

5	「止めろと言われたから、一番早そうな方法で止めました」
6	先生は戸惑った様子で、暴力は駄目だとしどろもどろになった。
7	「でも、止めろって皆が言ってたんです。私はあすれば山崎君と青木君の動きが止まると思っただけです」「先生が何を起こっているのか分からなかった私はそう丁寧に説明し、職員会議になって母が呼ばれた
8	なぜだか深刻な表情で、「すみません、すみません…」と先生に頭を下げている母を見て、自分のしたことはどうやらいけないことだったらしいと思ったが、それがなぜなのかは、理解できなかった。

1行目では、恵子が「止める」という言葉を文字通りに受け取り、用具入れからスコップを取り出して、暴れていた男子の頭を叩いた様子が描かれている。2行目では、周囲は絶叫し、叩かれた男子が倒れる様子が描写される。3～4行目では、女の子たちが泣きながら恵子に止めるようと叫び、教師たちが駆けつけ、恵子に事情を聞いた。恵子はスコップで叩くことが一番早そうな方法だと思った(5行目)。それに対して教師は困惑しながら暴力はいけないと伝える(6行目)。さらに恵子は丁寧に、自分の行動が合理的だと考えた理由を説明したが(7行目)、事態は職員会議に発展し、母親が呼ばれることになる。自分が何の間違いをしたのか、またはなぜ自分のお母さんはそこまで謝っているのか、恵子は理解できなかった(8行目)。

『コンビニ人間 pp. 15-16』	
1	教室で女の先生がヒステリーを起こして教卓を出席簿で激しく叩きながらわめき散らし、皆が泣き始めたときもそうだった。
2	「先生、ごめんなさい!」「やめて、先生!」
3	皆が悲惨な様子で止めてと言っても収まらないので、黙ってもらおうと思って先生に走り寄ってスカートとパンツを勢いよく下ろした。
4	若い女の先生は仰天して泣き出して、静かになった。
5	隣のクラスの先生が走ってきて、事情を聞かれ、大人の女の人が服が脱がされて静かになっているのをテレビの映画で見たことがある、と説明すると、やっぱり職員会議になった。
6	「なんで、恵子はわからないんだろうね…」学校に呼び出された母が、帰り道、心細そうに呟いて、私を抱きしめた。自分はまた何か悪いことをしてしまったらしいが、どうしてなのかは、分からなかった。
7	父も母も、困惑してはいたものの、私を可愛がってくれた。
8	父と母が悲しんだり、いろんな人に謝ったりしなくてはいけないのは本意ではないので、私は家の外では極カンを利かないことにした。

次に挙げたのは、ヒステリーを起こしている女の先生を止めるために、その先生のスカートを下ろした場面だ。1行目では、教室で女の先生がヒステリックに出席簿を叩きながら怒鳴り、生徒たちが泣き出している様子が描かれている。2行目では、生徒たちが泣きながら「やめて」と訴えるが、その先生は収まらなかった。そのため、恵子は先生を黙らせるため

に、その先生のところに走り寄り、スカートとパンツを勢いよく下ろした（3行目）。この行動に驚いた先生は泣き出し、教室は静まった（4行目）。その後、隣のクラスの教師が来て事情を聞くと、恵子は「映画で見たから」と説明したが、再び職員会議が開かれることになった（5行目）。6行目では、母親が「なんで恵子はわからないんだろうね」とつぶやきながら抱きしめる場面が描かれ、恵子はまた「何か悪いことをしてしまったらしい」と感じるが、なぜなのかは分からなかった。両親は困惑しつつも、恵子を可愛がってくれていた（7行目）。可愛がってくれている両親をこれ以上悲しませたり、人に謝らせたりしないよう、恵子は家の外ではなるべく話さないように決意する（8行目）。

この三つの場面から恵子の行動に一貫して見られる「セミオティック」な欲動がある。恵子が取った行動は、いずれも「結果的には問題解決に向かっている」点で、極めて合理的かつ目的志向である。例えば、喧嘩が止まった、または先生が黙ったなど恵子の行動によって全員が求められた結果を達成している。それにもかかわらず、なぜ恵子は周りに許されていなかったのだろう。その理由は、恵子の行動はあらゆる社会の「シンボリック」秩序を崩そうとするからだ。

社会には、死を「神聖で厳粛なもの」として扱い、死体を埋葬したり、供養することで敬意を示すという象徴的な秩序が存在する。同時に、「何を食べてよいか」「何を食べてはいけないか」という食の秩序も維持されている。小鳥の事件はこの両方の秩序に関わっており、死んだ小鳥は「哀悼すべき存在」であり、かつ「食べてはならないもの」と位置づけられている。幼少期の恵子が死んだ小鳥を「食べよう」とした行為は、この二重の秩序を同時に逸脱するものであり、その行動は周囲に強い違和感や不気味さを与えたのである。

また、恵子の学校での行動にも同様の逸脱が見られる。社会には「暴力はいけない」「喧嘩は止めるべきだ」という象徴的な規範があり、同時に、喧嘩を止める方法にも「冷静に仲裁する」「大人や教師に報告する」といった一定の秩序が存在する。恵子は、男子同士の喧嘩を止めるためにスコップで相手の頭を叩いた。この行為は、表面的には「喧嘩を止める」という目的を達成しているものの、その手段が社会の象徴的な規範から大きく逸脱している。すなわち、「暴力を用いて暴力を止める」という矛盾した方法は、社会の中で強い違和感と拒絶を生むのである。先生のスカート下ろす時も、同じことが起きた。目的が達成だとしても、そちらに至るまでの方法は社会的に合わなければ、拒絶されることになる。要するに、「非暴力」、「死への敬意」「教師への敬意」といった価値規範に真っ向から反しているため、周囲からは「不気味」「異常」として拒絶される。

このように、恵子の「セミオティック」な衝動は、実際には状況を解決させる役割を果たしているにもかかわらず、その表出の形態が「シンボリック」とかけ離れているため、彼女は他人に「理解できるが、受け入れられない」という曖昧な位置に置かれる。まさに、この「曖昧さ」、「境界侵犯性」が、クリステヴァのいう「オブジェクト」の特徴である。恵子は「他者」として完全に排除されるわけではなく、「同一化」されることもなく、境界上に位置する不穏な存在として、周囲に不安と恐怖を引き起こす。

さらに、母親の視点から見ると、このような「娘の異常な行動」は単なる問題児ではなく、「正常な家庭の内部」から発生した異質さとしてより強い恐怖を喚起する。これは、バーバラ・クレイド (Creed, 1993/2023) のいう「モンスター的女性」像に関連がある。身内でありながら、象徴的秩序を揺るがす恐怖の根源と重なる。恵子は「娘」という「シンボリック」な立場にありながら、その行動によって「母にとってのアブジェクト」となり、より強い拒絶反応を招いたのである。実際、作品全体を通して、恵子に向けられる拒絶や違和感の多くは、家族や身近な友人といった、彼女を「自分たちの内側」に属する存在と認識している人々から発せられている。これは、身内からの逸脱がより強く不安や嫌悪感を引き起こすことを裏付けていると言えるだろう。

恵子は両親を悲しませるつもりはないため、自分から行動を取るのをやめることにした (pp. 16)。また、出来れば口を利かないこともした。恵子の中でセミオティックな衝動、すなわち合理的・身体的・直感的な行動傾向はいったん抑圧される。このようにして、「異常な子ども」として拒絶される経験を重ねた恵子は、やがて自らの「セミオティック」を抑圧し、「問題を起こさない」「黙って従う」という「シンボリック」な仮面を身につけていくことになる。その「仮面」を最も効果的に機能させる場として選ばれたのが、後に彼女が人生の中心とすることになる「コンビニ」という空間であった。次節では、このコンビニという場を通じて、恵子がいかに「普通の人間」を演じようとしたのか、そしてその擬態がどのように揺らいでいくのかを考察する。

4.2 秩序の中で生きるために：恵子とコンビニの共依存

この節では、恵子がコンビニで働き始めるまでの経緯を描いた本作の18ページから27ページを中心に分析する。必要に応じて、他の部分の描写も補助的に取り上げる。コンビニという空間を通じて、恵子が「普通」を模倣しようとする試みと、その限界を中心に分析する。

まず、恵子の行動の根底には、小鳥が死んでいるのを見つけた際に、それを「神聖なもの」として土に埋めるという行動や、小学校のトラブルに対して即座にスコップで殴るという手段を選んだことは、彼女の行動原理が「感情」「倫理」「空気」といった象徴的秩序よりも、自己の内側から湧き上がる本能的な論理 (セミオティック) に強く基づいている。その衝動は常に社会にある秩序 (シンボリック) に合っているわけではないため、彼女は「普通の人」を演じた。恵子自身も「……母も父も心配した。私は『治らなくては』と思いながら、どんどん大人になっていた」 (pp. 18-19) と語っており、この「治らなくては」という思いは、彼女を無意識のうちに「普通」になれる場所を探し求めるよう駆り立てている。

そのような中で出会ったのが、コンビニという労働空間である。恵子は「私は店員になり、世界の歯車になれる。そのことだけが、私を正常な人間にしているのだった」 (pp. 27) と述べている。コンビニにはマニュアルに従えば「店員」になれるという明確なルールが存在する点は、彼女に大きな安心感を与えてくれる。前の分析でも述べたように、恵子には「何でも効率的にやりたい」というセミオティックな衝動があり、それがコンビニの要求と見事

に一致していたため、彼女はこの空間に深い適合感を覚えるのである。

コンビニにおいては、倫理や感情、空気の読み合いといった社会的な曖昧さを考える必要がなく、マニュアルに従っていれば何も問題は起きない。つまりこの空間は、恵子にとって初めて「正常な人間」として社会の中に存在できる場所であった。このコンビニでの経験により、彼女は両親の不安を一時的に和らげることに成功している。また、バイトを始めるころは、恵子はまだ大学生であるため、アルバイトをしているという状況は、シンボリックな秩序が想定する「過渡的」な労働形態として、まだ許容範囲内に留まっていた。

ただし、その安定は長く続かない。社会は恵子の長期間の非正規労働を受け入れないことが多い。大学卒業後も恵子が同じコンビニで働き続けることで、再びシンボリックな秩序とのずれが生じる。彼女は「いつまでも就職をしないで、執拗とっていいほど同じ店でアルバイトをし続ける私に、家族はだんだんと不安になったようだが...」（pp. 25）と語っており、これは象徴秩序が期待する「定職就労」という枠組みに適合していないことによる拒絶を示している。さらには、友人と集まる場面において、「あの、え、それなのにアルバイト」「え、ずっと...?いや、就職が難しくても、結婚くらいした方がいいよ。」（pp. 81）といったセリフが繰り返されるように、彼女が「何者」でもないことに対する周囲の戸惑いと排除の気配が露骨に現れる。このような拒絶は物語後半になるほど強まっていく。恵子は一週間で14回、「何で結婚しないの」と言われ、「何でアルバイトなの？」は12回だ。（pp. 96）。

これらの社会からの拒絶は、象徴秩序がその規範を維持しようとする働きの一環である。すなわち、「アルバイトは一時的なものであり、成人すれば正社員として就職するか、結婚するのが当然である」という価値観が揺らぐことを社会は許容しない。恵子が長年にわたって同じコンビニでアルバイトを続け、しかもその仕事において過剰とも言えるほどに有能であることは、この象徴秩序にとっての逸脱である。本来、一時的・補助的であるはずの労働において、彼女が「完璧に店員だった」（pp. 22）と自負するほどに適応しきってしまっていることが、かえって「異様」さを際立たせる。

また、年齢を重ねても正職や結婚に対する“危機感”を持たず、現在の状態に安定と安心を見出している点も、彼女が社会的に「不気味」な存在＝オブジェクトと見なされる要因である。友人たちと集まる場面でも、結婚相手について盛り上がる中、恵子は「このままじゃ...あの、今のままじゃだめってことですか？ それって何ですか？」（pp. 83）と遠慮がちに尋ね、結果として場の空気を壊してしまう。このような周囲の反応もまた、象徴秩序の圧力を明確に示している。象徴秩序においては、「本来一時的であるべき職業」に長く留まり続け、かつそれに満足している存在は秩序の境界を揺るがす異物として排除の対象となる。従って、恵子に対する周囲の拒絶や違和感の表明は、単なる価値観の相違にとどまらず、象徴秩序の防衛としてのオブジェクションの作用に他ならない。要するに、恵子は結婚と就職をシンボリックに迫られている。

恵子がアブジェクトとなる背景には、①長年の非正規労働、②定職と結婚への危機感の欠如、③仮の職場での過剰なまでの有能さ、という三つの要素がある。これらの複雑な要素により、恵子の生き方は象徴的秩序の枠組みで単純に理解できず、「不定形で不安をもたらす存在」として社会から排除される結果になるのである。

このように、コンビニという労働空間は一時的に恵子に「普通でいられる場所」を提供したが、年齢を重ねるにつれて、社会が求める象徴的な規範。それは正規就職や結婚という秩序とのズレがますます顕在化し、彼女は再び強い違和感と排除の視線に晒されていく。物語の中には恵子と同様に、こうした社会的圧力に苦しむもう一人の人物が登場する。それが白羽である。次の節では、社会的規範から逸脱する二人の人物が互いに協力し、「偽りのパートナーシップ」を築くことで、象徴秩序への対抗を試みる過程を分析する。ただし、その試み自体がむしろ彼らの「異様さ」を強調し、さらなるアブジェクション（排除と不安）を引き起こす様子を明らかにしていく。

4.3 正常を装う：白羽との偽りパートナーシップ

本節では、恵子が物語終盤で白羽と擬似的なパートナーシップを結ぶ過程を分析し、この行為がいかに社会からの排除を一時的に回避しようとする戦略であると同時に、彼女のアブジェクト性をさらに際立たせる結果となるのかを考察する。

『コンビニ人間 pp. 89-90』	
1	「この世界は異物を認めない。僕はずっとそれに苦しんできたんだ」ドリンクバーのティーバッグのジャスマンティーを飲みながら、白羽さんがいった。
2	「皆が足並みを揃えていないと駄目なんだ。何で三十代半ばなのにバイトなのか。何で一回も恋愛もをしたことがないのか。性行為の経験の有無で平然と聞いてくる。
3	あいつらは！誰にも迷惑をかけていないのに、ただ、少数派だというだけで、皆が僕の人生を簡単に強姦する
4	どちらかという和白羽さんを被害者意識は強いのに、自分が加害者かもしれないとは考えない思考回路なんだなあ、と思って眺めた。
5	自分を可哀そうがるのが白羽さんの趣味なのではないかとすら思いながら、「はあ。それは大変ですね。」
6	白羽さんは、「だから僕は結婚して、あいつらに目を言われたい人生になりたいんだ。」と言った。
7	「金がある相手がいい。僕にはネット起業のアイデアがあるんだ。真似されたら困るから、詳しく説明できないですけどね。それに投資してくれる相手が最高だ。そうしたら、だれも僕に文句を付けられない」
8	「え、自分の人生に交渉してくる人達を嫌っているのに、わざわざ、その人たちに目を言われたいために生き方を選択するんですか？」それは結局、世界を全面的に受容することなのは、と不思議に思ったが、
9	「僕はもう疲れたんだ」と白羽さんが言うので頷いた。

これは、恵子が白羽とファミリーレストランで会話を交わす場面である。きっかけは、恵

子が白羽を、同じコンビニで働く若い女性店員をつけ回している現場で見つけたことだった。その後、二人はレストランに入り、白羽は社会や生きづらさについて語った。この場面で、白羽は社会が「異物」を認めないこと、つまり少数派や規範から逸脱する存在を排除しようとする社会の構造に対する不満を語る（1～3行目）。白羽は結婚相手を見つかるために、その女性店員を付けまわったと言っていた（6行目）。

彼は自分がその「異物」として長年苦しんできたと述べ、三十代半ばでアルバイトをしていることや恋愛・性経験の欠如が、周囲からの強い干渉や評価の対象になることに憤りを感じている。白羽は自らを常に被害者として捉え、自分が加害者になる可能性や、他者への影響には無自覚であると恵子は冷静に観察する（4行目）。また、白羽が結婚したい理由も「社会に文句を言わせないため」であり、本質的には社会の価値観に屈服しようとしているだけに見える。自分を抑圧する社会を否定しながらも、その社会の目を恐れ、社会の期待に合わせた生き方を選択しようとする白羽の姿に、恵子は違和感を覚える（8行目）。最後に、白羽が「もう疲れたんだ」と呟くと、恵子はその言葉に共感するように、あるいは諦めにも似た気持ちで静かに頷くのだった（9行目）。

『コンビニ人間 pp. 95-98』	
1	「白羽さん、婚姻だけが目的なら私と結婚届を出すのはどうですか？」
2	自分の席に二杯目の白湯を置いて椅子に座りながら切り出すと、白羽さんが、「はあ!？」と大声を出した。
3	「そんなに干渉されるのが嫌で、ムラを弾かれたくないなら、とっとすれればいいじゃないですか?狩り…つまり就職に関しては分かりませんが、婚姻することで、とりあえず、恋愛経験や性体験云々に対して干渉されるリスクはなるなるのは?」
4	「突然なにを言ってるんだ。ばかげてる。悪いですけど、僕は古倉さん相手に勃起しませんよ」
5	「勃起?あの、それが婚姻と何の関係が?婚姻は書類上のことで、勃起は生理現象ですが」
6	「白羽さんの言うとおりの、世界は縄文時代なのかもしれないですね。ムラに必要なない人間は迫害され、敬遠される。コンビニと同じ構造なんですね。コンビニに必要なない人間はシフトを減らされ、クビになる」
7	「何を言っているのかわからない」
8	「つまり、皆の中に『普通の人』という架空の生き物を演じるんです。」
9	白羽さんは言葉がない様子で、コーヒーをただ睨んでいた。
10	「白羽さん、それじゃ家に来ませんか?食費を出してくれば泊めますよ」
11	私はもう面倒になり、「あ、」「いや、でも」などという白羽さんを強引に家に連れ帰った。

これは先ほどの場面の続きである。恵子は白羽に「私たち、結婚しませんか」と突然提案する（1行目）。当然、白羽はその予想外の提案に驚く（2行目）。恵子は落ち着いた口調で、その提案の理由を論理的に説明する（3行目、6行目）。一方、白羽は「君には性的に興奮しない」と返す（5行目）。この発言は、白羽が結婚という制度を依然として性的な関

係と強く結びつけて捉えており、彼自身がいかに象徴的秩序（シンボリック）の圧力の中に取り込まれているかを如実に示している。恵子はあくまでも「周囲の目をごまかし、普通の人間として社会に受け入れられるため」の手段として結婚を提案している（8行目）。二人の偽装結婚は、象徴的秩序である「結婚」という社会的枠組みに自らを合わせるための戦略だと言える。白羽は当初この提案に消極的だったが、最終的には恵子のアパートに住み始めることになる（11行目）。

このような中で、恵子はこれまでも「普通」の人間として受け入れられるために様々な努力をしてきた。たとえば、コンビニのアルバイトを続ける理由を家族に対して捏造したり、周囲の女性たちの話し方や服装を真似したりといった行動である。それでもなお社会からの圧力は弱まるどころか、ますます強まっていった。

「ここ二週間で14回、『何で結婚しないの』と言われた。『何でアルバイトなの?』は12回だ（pp. 96）」と述べるように、恵子は周囲からの視線や言葉に日常的に晒されている。彼女は「とりあえず、言われた回数が多いものから消去していってみようかなと思った」と効率的に対処しようとするが、その発想自体がいかに彼女の内面が社会の価値基準に支配されているかを物語っている。

その上で、彼女は「皆が不思議がる部分を、自分の人生から消去していく。それが治るといことなのかもしれない」と語る。この言葉は、恵子にとっての「治る」とは、社会にとっての「異物」的要素を消去し、「普通の人」に擬態することであることを示唆している。こうした背景のもと、恵子は社会からの干渉を一挙に回避する手段として、白羽との「偽りのパートナーシップ」を選択するに至るのである。

この白羽とパートナーシップのは、恵子の妹や職場の同僚たちを大いに喜ばせた。電話で事情を聞いた妹は、姉がどのような人物と付き合っているのかを気にしていたが、結婚の報告を聞くと素直に喜び、「おめでとう」と伝えた（pp. 99）。以前は白羽を激しく非難していた同僚たちでさえ、結婚という形式をとることで二人の存在が象徴的秩序に適合するようになり、その脅威が消えたかのように受け入れる姿勢を見せたのである。

このことから、シンボリックの枠組みが、個人が社会から受け入れられるか排除されるかを大きく左右することがわかる。周囲の人々に見える「表面的なアイデンティティ」が、社会が求める象徴的秩序と一致していれば、その人はたとえ内面や実態がどうであれ、受け入れられる。ただし、そのアイデンティティが象徴的秩序に反する場合、その人は容易に排除や拒絶の対象となる。白羽と恵子のように、たとえそのアイデンティティが極めて不自然で不条理な形で構築されたとしても、表面的に象徴的秩序に適合している限り、社会はそれを受け入れるのである。

こうして、恵子と白羽は、象徴的秩序におけるもう一つの問題に直面することになる。それは、家庭を維持するために「一家の大黒柱」となるべき存在が必要だという社会の期待である。そのために白羽は、恵子にコンビニのアルバイトを辞め、正社員として働くよう求める。恵子もまた、白羽の「とにかく象徴的秩序に合わせようとする」考え方に影響を受け、

その提案を受け入れる。このようにして、象徴的秩序への適応をめぐる試みは、最終的に恵子を再び「コンビニ人間」から引き離し、新たな危機を引き起こすことになる。その過程については、次節で詳しく考察する。

4.4 私はコンビニ人間です

物語の終盤、白羽は自ら職を探すのではなく、恵子に対してコンビニのバイトを辞め、定職に就くよう求める。この提案の背後には、「コンビニバイト」は象徴秩序において「バイトだけでは、家庭を維持することができない」という、白羽自身の強い「シンボリック」への服従が見られる。彼は「無職とバイトだと、無職の僕の方が責められるし…でも、古倉さんさえ定職につけば、僕はそういう被害をもう受けなくて済みますし、古倉さんのためにもなるし、一石二鳥ですよね！」(pp. 144)と語っており、この発言は彼の適応戦略がいかに形式的で社会の視線に従属しているかを示している。

一方、コンビニの仕事を失った恵子は、急速にアイデンティティの崩壊に直面する。彼女は「今の私は何のために眠ればいいのかすら分からなかった」(pp. 145)と語り、生活の最小単位である睡眠すら目的を失ってしまう。

本研究の第4.2節でも述べたように、恵子の「セミオティック」はコンビニの「シンボリック」にとっても合致していると考えられる。マニュアルに従い、適切な挨拶、動作、表情を身に付けることによって、恵子は初めて「正常な人間」として生きる実感を得ていた。彼女にとって、コンビニの要求は外部の規範ではなく、内面化された身体的な欲動となっていた。したがって、その「シンボリック」を喪失した瞬間、彼女は「セミオティック」の軸も同時に失い、「意味のない肉の塊」に墮してしまふ。

「意味のない肉の塊」という表現は、単なる比喩的な描写ではなく、ジュリア・クリステヴァのアブジェクション (abjection) 理論における身体の「他者性 (他者としての身体)」の顕在化である。アブジェクションとは、自己と他者、主体と身体の世界が崩れ、身体が「排除されるもの」「拒絶されるもの」として現れる現象である。恵子の場合、「シンボリック」の枠組みを失い、自身の身体が意味や主体性を失った「意味のない肉の塊」と化すことは、まさにこのアブジェクト状態に陥っていることを示している。これは主体の崩壊と自己同一性の喪失を象徴し、身体がもはや自分自身の「もの」でなくなり、他者の視線や社会的規範の「他者」として立ち現れる瞬間なのである。現在、恵子に残された「シンボリック」は、白羽との偽りの関係だけである。しかし、その関係は彼女の「セミオティック」とはまったく無関係であり、彼女自身の内的なリズムや衝動を満たすことはできない。そのため、恵子の精神的な活力や生命力は完全に失われ、虚無的な状態に陥っていると言える。

恵子がうつ状態にあった間、白羽は彼女のために熱心に仕事の求人を探していた。そして、コンビニを辞めてから約一ヶ月後、ついに恵子に面接の連絡が来た (pp. 153)。面接当日、白羽は恵子を面接会場まで送り届けることを申し出た。二人は予定より早く到着し、まだ時間があった。白羽が「ちょっとトイレに行ってきます」と言って立ち去ると、恵子は彼の後

を追い、公衆トイレではなく近くのコンビニに入っていく姿を見た (pp. 153)。自動ドアが開いた瞬間、懐かしいチャイムの音が響き渡り、その「コンビニの『声』」が恵子の内側に流れ込んだ (pp. 154)。コンビニ内のあらゆる音が意味を持って細胞に語りかけるように震え、まるで音楽のように共鳴していた (pp. 154)。この瞬間は、恵子の主体性が再び生まれ、長く失われていた「普通の人間」としての感覚とアイデンティティが、コンビニの空間と秩序の中で回復し始めたことを示している。恵子は困っている新人店員を手伝い始めた。その様子をトイレから出てきた白羽は恵子に怒鳴った。

『コンビニ人間 pp. 158-159』	
1	「なにしているんだ！」という怒鳴り声をした。
2	「お客様、どうなさったのですか」反射的に答えると、「ふざけるな！」と言われて、店の外へと連れて行かれた。
3	「何、馬鹿なことをやってるんだ、お前は！」
4	「コンビニの『声』が聞こえるんです」
5	「身体の中にコンビニの『声』が流れてきて、止まらないんです。私はこの声を聴くために生まれてきたんです。」
6	「気が付いたんです。私は人間である以上にコンビニ店員なんです。人間としていびつでも、たとえ食べて行けなくてたれ死んでも、そのことから逃れられないんです。私の細胞全部が、コンビニのために存在しているんです。」
7	「狂ってる。そんな生き物を、世界は許しませんよ。ムラの掟に反している！皆から迫害されて孤独な人生を送るだけだ。そんなことより、僕の為に働いたほうがずっといい。皆、そのほうがほっとするし、納得する。全ての人が喜ぶ生き方なんですよ。」
8	「一緒に行きません。私はコンビニ店員という動物なんです。その本能を裏切ることはできません。」
9	「そんなことは許されないんだ！」
10	「いえ、誰に許されなくても、私はコンビニ店員なんです。人間の私には、ひょっとしたら白羽さんがいたほうが都合がよくて、家族や友人も安心して、納得するかもしれない。でもコンビニ店員という動物である私にとっては、あなたはまったく必要ないんです」

物語の終盤における白羽との対立場面 (pp. 158-159) は、恵子が象徴秩序の外側に自らを置き、最終的に「セミオティック」の自己へと回帰する決定的瞬間である。彼女は「私は人間である以上にコンビニ店員なんです」「私はこの声を聴くために生まれてきたんです」と語り、自らの身体的欲動と欲求に従った「コンビニ店員という動物」としてのアイデンティティを、理性的に、かつ主体的に選び取る。ここで語られる「私はコンビニ人間です」という自己規定は、象徴秩序に適合できない者としての「*abject*」の自認であり、クリステヴァのいう「*le sujet en procès* (生成過程にある主体)」の一つの帰結である。

この時点で、恵子にとって「象徴的」な関係性である白羽とのパートナーシップは、すでにその意味を失っている。白羽は「シンボリック」に完全に従属し、自らの「セミオティック」を喪失している存在であり、その内面は空虚である。彼は社会の「普通」に同調することを唯一の目標とし、その姿はまさにクリステヴァが語るような「オブジェクト化の暴力」によって形成された空洞の主体である。

これに対して恵子は、自らのオブジェクト性を否認せず、それを肯定することで主体を回復する。「セミオティック」を抑圧しようとする「シンボリック」への最終的な拒絶が、「私はコンビニ人間です」という言葉に凝縮されている。この言葉は単なる自己定義ではなく、社会における規範的な主体のあり方への反逆であり、「異物」として排除された存在が、自らを異物として受け入れることで生まれるラディカルな主体化の瞬間である。

この物語に響くのは、フィクションの枠を超えた、私たちの現実そのものの痛みである。ジェンダー的少数者、神経多様性をもつ人々、労働の周縁に生きる者など、社会が「正常」とみなす枠組みに収まらないすべての存在は、「セミオティック」のざわめきを宿しながら、しばしば「オブジェクト」として押し出され、黙殺されていく。だが、その抑圧にも限界がある。沈黙を強いられ続けた声は、いつか必ず溢れ出す。象徴秩序の檻が崩れたとき、逸脱は、汚れでも狂気でもなく、むしろ真実への回帰となる。その真実とは、違いが必ずしも危険なものではないということ。また、その違いに向けられる私たちの恐怖こそが、人を傷つける力を持つという事実である。

5. 結論

本研究は、村田沙耶香の小説『コンビニ人間』における主人公・古倉恵子の語りと行動を、ジュリア・クリステヴァのオブジェクション理論、とりわけ「セミオティック」と「シンボリック」の緊張関係、または「le sujet en procès（生成過程にある主体）」という概念を通して読み解くことを試みた。恵子は、幼少期より社会的な規範や言語秩序に「うまく適応できない存在」として周囲から異物視されてきた。彼女の生存戦略は、象徴秩序における「正常さ」を演じることであり、そのためにコンビニという空間は、彼女にとって「シンボリック」と「セミオティック」が仮に接続される場であった。

白羽との関係によりその空間が失われたとき、恵子のアイデンティティは崩壊し、彼女は「意味のない肉の塊」へと墮していく。この状態は、身体と主体の境界が解体され、自己が排除されたものとして現れるという、まさにオブジェクションの状態である。恵子は「普通であること」に適応しようとする象徴秩序の暴力の中で、自らの欲動、身体感覚、存在の根拠を次第に失っていった。

物語の終盤、恵子は再びコンビニの「声」に身体を貫かれ、自らの内的な欲動と共鳴する秩序に身を委ねる。「私は人間である以上にコンビニ店員なんです」という言葉は、象徴秩序に属する「人間」としてではなく、オブジェクトとして生きることを選び取る主体の宣言である。これは「セミオティック」を抑圧する「シンボリック」への最終的な拒絶であり、

同時に、アブジェクトとしての自己を肯定し、逸脱を通して新たな主体性を獲得する過程の頂点でもある。

本作品は、恵子という個人の物語を通じて、「正常さ」の名のもとに抑圧・排除されるすべての存在も物語っている。ジェンダー的少数者、神経多様性をもつ人々、労働の周縁に生きる者たちの声なき声を浮かび上がらせる。そこには、アブジェクトとしてしか存在できない者が、アブジェクトであることを通して自己を回復し、主体化へと至る可能性が描かれている。

『コンビニ人間』に響くのは、逸脱や異物を拒む社会の沈黙を打ち破る、静かで確かな声である。その声は、私たちが「正常」であることに安住する姿勢を揺さぶり、「アブジェクト」として排除される存在に目を向けるよう促す。それは、不快さを引き受けながらも、「人間らしさ」とは何かを問い直す倫理的契機である。恵子の宣言「私はコンビニ人間です」は、単なる自己肯定ではない。むしろ、社会のシンボリックな秩序の外で生きることの尊厳を擁護し、そこに潜む人間の可能性を照らし出す、切実でラディカルな一言なのだ。

6. おわりに

本研究では、村田沙耶香の小説『コンビニ人間』におけるアブジェクションの理論を用いて、象徴秩序とセミオティックの対立を軸に、恵子という存在の主体化の過程を分析した。恵子のように「正常さ」から逸脱した人物像は、文学に限らず、現代日本のメディアやポップカルチャーにおいても多様に再現されている。

したがって、今後の研究においては、小説という文学的テキストにとどまらず、テレビドラマ、バラエティ番組、漫画、アニメ、広告など、さまざまなメディアにおける「社会的不適応者」や「非生産的な女性」の表象を分析することで、アブジェクションのメカニズムが社会全体においてどのように作用しているかを明らかにすることができると思う。特に、「普通であること」や「女性としての役割」に関する言説がメディアを通じていかに構築され、消費され、また逸脱者がいかに排除または矯正されようとしているのかを検討することで、現代日本社会における規範の強化と逸脱への不寛容さの構造に迫ることが可能になる。

このようなメディア言説分析は、文学テキストにおける逸脱の表象を相対化し、より広い社会的文脈の中でアブジェクションを再考するための重要な手がかりとなるだろう。

参考文献

- (1) クリステヴァ、ジュリア (1980)、枝川 昌雄 (訳) (1984) 『恐怖の権力』法政大学出版局
- (2) 村田紗耶香 (2018) 『コンビニ人間』文藝春秋
- (3) Creed, B. (2023). *The monstrous-feminine: Film, feminism, psychoanalysis* (2nd ed.). Routledge. (Original work published 1993)
- (4) Foucault, M. (1975). *Discipline and punish: The birth of the prison* (A. Sheridan, Trans.). Pantheon Books.
- (5) Gaur, R. (2023). *Precarity and Performativity in Post-Fordist Japanese Workplace: A Reading of Sayaka Murata's Convenience Store Woman*.
- (6) Kristeva, J. (1974). *The Revolution in Poetic Language*. Columbia University Press
- (7) Nayak, M., & Aashrita, M. (2023). *Gendered Perspectives and Performativity in Sayaka Murata's Convenience Store Woman*. *Indian Literary Nexus Journal*.
- (8) Pentony, S. (1996). *How Kristeva's theory of abjection works in relation to the fairy tale and post-colonial novel: Angela Carter's The Bloody Chamber, and Keri Hulme's The Bone People*. Oxford Brookes University.
- (9) Phumsom, C. (2023). *The Masculinity Crisis of the Male Protagonist in Convenience Store Woman by Sayaka Murata*. Thammasat University
- (10) Tyler, I. (2013). *Revolting Subjects: Social Abjection and Resistance in Neoliberal Britain*. Zed Books.
- (11) Yulistari, M., & Aisah, A. (2022). *Woman Stereotype in the Novel Convenience Store Woman by Sayaka Murata (2016)*. *Journal of English Language and Literature*, 11(1), 1–10.